

# 鷺見五郎先生の お人柄



白梅学園短期大学教授 民秋 言

## ※1※

鷺見五郎先生は大正五年鳥取県米子市に出生された。

鷺見家はもとは米子城警護を担う米子組士をつとめたさむらいの系譜をもつ。由緒正しい、日本のよき文化を直系的にうけついでいる家系ときいている。

先生は七人きょうだいの末っ子である。母上が熱心なクリスチャン（「聖公会キリスト教を信仰する開明的な婦人」）であった。ごきょうだいたちは聖公会の幼稚園に通い、幼い時からキリスト教と西洋音楽に触れ、それに慣れ親しんでおいでだった。

先生のごきょうだいはいずれも芸術家であり、しかもそれぞれの世界で著名な方ばかりである。

## ※2※

鷺見五郎先生は、ピアニストであり、作曲・編曲家であり、そして指揮者でもあった。

第二次大戦前には、一時、NHKの東京放送管弦楽団にも属した。戦後は、ピアノソリストとして活躍されたが、とくに先生の名を世間に知らしめたのは、ヴァイオリニストの巖本真理や江藤俊哉の伴奏者としてであった。

伴奏者というソリストの引き立て役のように思う向きもあるが、そうではない。演奏はソリストと、すぐれた伴奏とのセットで成り立つと思う。それでいて、決して目立ってはいけないうである。

巖本真理や江藤俊哉といった超一流の演奏の伴奏は、並

みのピアノリストではつとまらないであろう。ソリストのよさを十分に引き出すような技法が求められるようである。そこには、テクニクだけではなく、パーソナリティも大きく影響していよう。

音楽について門外漢である筆者には、これ以上のことは論じられない。しかし、スーパースターの伴奏者たるためには、それなりの評価と名声が備わっていたといえよう。指揮者としての先生も十分語るに値しよう。フォンテンノーバアンサンブルを主宰し、東京文化会館などではしばしばコンサートを開催された。

鷺見五郎先生の作曲・編曲作品にもファンは多い。その代表的なものを揚げると、次のとおりである。

- 「シューベルト女声3部合唱選曲集」(編曲)妹尾幸陽訳詩、太陽出版社(1949)
- 「アイルランド民謡合唱曲集 女声三部」(編曲)全音楽譜出版社(1955)
- 「テクニクの基礎を作る ヴァイオリン合奏変奏曲集」(作曲集)(日の丸変奏曲・キラキラ星変奏曲・ロングロングアゴー変奏曲)鷺見三郎、鷺見四郎と共著、音楽の友社(1964)
- 「やさしいオルガン教室」(ソノシート付き教則本)朝日ソノラマ社(1966)
- 「オルガンのための12の前奏曲」(作曲)日本基督教団出版局(1968)

「ピアノのためのラプソディー」(作曲)全音楽譜出版社(1977)

「礼拝のためのオルガン曲集」(36曲作曲)日本基督教団出版局(1979)

「やさしく楽しいピアノメソッド」第一巻共同音楽出版社(1981)

「やさしく楽しいピアノメソッド」第二巻共同音楽出版社(1982)

「テクニクの基礎を作る、ヴァイオリン合奏変奏曲集2」(作曲・編曲)(メリーさんの羊変奏曲、スコットランドの釣鐘草変奏曲など)音楽の友社(1986)

「70のオルガン小曲集」日本基督教団出版局(1994)

### ※3※

鷺見五郎先生は、画家としても卓抜な才能をお持ちであった。

濃厚な油絵より、淡白といってもよいような水彩画を好まれた。しかし、どの絵にも、有り余るほどの情熱がほとばしっている。そして「音楽的リズム・ハーモニーを感じさせる絵として評価される」と紹介されている。

さきの音楽と同様、絵画にも人間的な包容的あたたかさと共に、妥協をゆるさない、筋の通った透徹さが随所に感じとれる。代々の米子藩士の気概と母上から受けたクリスマスチャニティとの融合ではないか、と思う。

### ※4※

「民ちゃん、ちゃーまばーかりしましょうか」、が、ほ

とんどの日曜日の午後一時頃の先生からのお言葉(おさそい)であった。

日曜日、日本基督教団田園調布教会の礼拝の後の、聖歌隊の練習を終えてのことである。先生は教会のオルガニストであると同時に、聖歌隊の指揮者でもあった。私が昭和三十八年に東京に住んで、はじめに出席したのがこの教会であった。聖歌隊にはいり、先生と知り合う幸運を得た。

どういう理由かわからないが、先生に面白いがって頂いた。すでに一流の芸術家の名をほしいままにされていた先生とお近付きになれたばかりでなく、しばしば食事などを共にしてくださる榮に書生の如き私が浴したのである。当時、東京教育大学の学生であり貧しかった。いつもいつもご馳走になった。

日曜日の昼食は、田園調布駅前にあった「ジャーマンベーカーリー」(ジャーマンばかりー)というレストランのランチであった。ハイカラな店だったし、料理もしゃれていた。

私は、東京教育大学大学院を修え、先生にお願いして白梅学園短期大学に勤めさせて頂いた。昭和四十六年のことである。

すでに、その時には、先生は白梅の教授であった。

### ※5※

お人柄からいって、決して派手さはないがいていねいで、

着実なお仕事をなさった。

白梅にとって特筆すべきは、保育者養成には欠かせないピアノの指導に熱意を傾けて下さったことである。その成果が、『学生のためのピアノメソッド』(一九八九年、共同音楽出版社)である。私は音楽教科の専門ではないので、必ずしも正確に伝えることはできないが、先生の赴任までは、バイエルなど一般に市販されて用いるテキストを用いていた。先生は、「白梅にオリジナルな音楽教育を」という思いを強くもたれた。

この『メソッド』編集のため、白梅の専任、兼任の多くのピアノ教師が先生のお宅に通った。編集の手伝いをする傍々、結果的には先生から多くのことを学んだようである。

鷺見五郎作曲・編曲の作品を多く含む『メソッド』は、白梅保育者養成にとつて誇るべき財産である。いまま学生の教科書として多方面から絶賛を博している。

白梅の保育音楽教育の基を築いて下さったのである。

### ※6※

平成12年、白梅の巨星がまた一つ墜ちた。鷺見五郎先生はいまは神に召され、天国におわす。あのおだやかだが峻厳な先生にもう一度お会いしたいと思う。「ジャーマンベーカーリー」のランチを一緒に食べたい。

本稿執筆にあたり『鷺見家の人物系譜』(米子市立山陰歴史館)を引用・参考とした